

2月18日のUTMからのマレーシア人学生受け入れ以来、私はほぼ毎日留学生と接する機会があり、また先週末は留学生の案内役として彼らと一日を共にした。このレポートでは、まだごく短い期間ではあるが密度の濃い交流を経験する中で関心を持ったこと、また留学生との会話の中から学んだことをきっかけに、文献などを読んで得た情報の一部をまとめる。

私が留学生受け入れ日に感じたのは、最初インド系とみられる留学生と他の留学生との微妙な距離であった。最初私はそれを日本人によく見られる性別の違いゆえの気まずさかと思っていたが、後で話を聞くと、実際にはインド系のヒンドゥー教徒とイスラム教徒ということであった。またその後、彼らを案内する上で特に食に関する問題を筆頭に、様々な価値観や生活様式の差異を痛感することとなった。そこで今回は「多民族社会」をキーワードにマレーシア社会の背景を知ろうと考えた。文献によると、マレーシア国民は現在マレー系、華人系、インド系の3つのタイプに大別することができる。またもともとマレー系は上流階級が統治者、一般人は農業従事者、また華人系は主に上流階級が商業、一般人は賃金労働者が多くと捉えられているという。またプミプトラ政策によりマレー人優遇政策がとられてきているが、インド・華人系の多くはマレー系が優遇されていると感じているという一方、大多数のマレー人はさほど優遇されているとは感じておらず、実態は優遇政策の恩恵が一部のマレー人に限られている状態と考えられている。また、インド人の多くは南インドから苦力として連れてこられたタミル系にルーツを持つなど、こうした社会的な民族・経済状況に対するイメージの差異が常に火種として多くの人々の意識の根底にあるようである。ただし多くは民族間の支配-従属関係ではなく、同じ民族集団内に階級社会が存在しており、歴史的にしばしばそうした同一集団内での階級社会を維持するために民族間の差異が利用されるといったこともある。なお現在の憲法に記載されている「マレー系の定義」として、イスラム教信者、マレー語を日常的に用いること、マレー式の生活習慣を身に着けていることという3条件を満たすことが求められており、こうした所属集団の違いは宗教とも密接に結びついていると言われる。特にマレーシアの場合は、イスラム教徒であるマレー人が日常的に豚肉を食する華人の生活といった非イスラム文化と接触しており、これが彼らにアイデンティティを強く意識させる一因であるとも考えられている。週末に直接話さず、ヒンドゥー教徒の留学生がしばしば強調したのが、イスラム教徒の食の制約の厳しさであった。確かに彼らは加工品がハラールであることを非常に念入りに確認し、ハラール表示のある飲食店にしか入らない。また今回の派遣でプトラ大学ではハラールフードなどに関する研究室を見学することになっている。文献によるとマレーシアでは食生活において中東などと比べハラールにあたる食品などに遭遇する機会が多いことからハラール認証制度が普及しており、その背景を生かして近年の加工食品の増加に対応した国際的なハラールフード需要を産業につなげていく狙いがあると分析されていた。イスラム教はヒンドゥー教などと比べ全体的にタブーが具体的かつ多岐にわたり、それに関連してしばしば他宗教の文化・生活を不浄とみなす場合がある。私は以上の文化と宗教的習慣が密接に結びついたバックグラウンドについて調べながら、やはりお互いに明言は避けるものの、現在の学生においても他者に対する先入観や許容にかかる時間の違いにこうした要素が影響を及ぼしているのだろうと感じた。ただしその一方、マレーシア自体はイスラム教を連邦の宗教として認定しているが全体として非マレー系の一方的排除ではなく共存関係の維持を志向している。これについてはやはり経済において華人系の果たす役割が大きいなど各階層の社会的利益・関係の関与が背景としてあると言われる。

語学に関しては、留学生同士ではマレー語、日本人教員・学生との間では英語を使用していた。英語の使用開始時期を尋ねたところ、やはり進学に伴って英語を使用するようになったということや、高校まではマレー語で授業を行う学校も存在し、そこから進学した生徒はやはり日本の多くの学生と同様、授業や資料の多くで英語が使用される状況に苦戦しているようだ、という。特に生物系では専門用語を英語に置きかえて再度理解する必要があり、高校から英語により専門科目を学習することが大学進学後に大きく影響しているようである。また、マレーシアでは日本以上に専門書の多くが洋書であるそうである。留学生の一人は、自分たちは多くの知識を西洋から取り入れる必要があるが、日本は先進国でありそうしたものが自国内で供給されるためにそれほど英語を身につけなくても大丈夫なのではないかと私に話した。しかし科学の世界において論文は英語で発表されるものであり、裏を返せばこうした社会の疑似的な充足感に日本の学生が流されていることが浮かび上がってくるように感じられる。やはり当然のことながら、こうした学生生活における英語の必要性は英語習得への原動力となっている。今後は特に高校までの授業をマレー語で受けてきた生徒がどのように大学の環境に順応していくのか調べていきたい。

日常において外国の民族構成や宗教に関心を持つ機会はあまり多くないと思う。今回日本において、異質な文化的背景を持つ留学生を受け入れその差異が表面化する事態に直面しながらも、マレーシアを多民族国家という観点から捉える機会を得たことは大変貴重な体験である。